板付周辺遺跡調査報告書

(8)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第83集

—1981年度調査概要—

1982

福岡市教育委員会

序　文

板付遺跡は、わが国の水田稲作開始期の集落と、その当時の水田技術を考えるうえで、貴重な文化遺産です。

1966年以降の調査によって、わたしたちは、その一部を知ることができるようになりました。

今年度の調査では、板付遺跡周囲の沖積地に、弥生時代から古墳時代、さらに奈良、平安時代の永きにわたる水田が広い範囲に埋没していることが判明しました。

板付遺跡の中心部は、1974年に国の指定をうけ「史跡」として恒久的な保存措置が講じられました。将来、生きた歴史教育、社会教育の場として活用されるよう整備してまいりたいと思います。

これも、地元の方々をはじめ、多くの関係者の方々の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力によって成しとげられるものであると信じます。

本書が、市民各位の文化財保護思想の育成に活されるとともに、広く日本の歴史研究の分野に役立つことを願うものであります。

昭和57年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　西津茂美

目　　次

Ⅰ　はじめに……（柳沢）……1

Ⅱ　E－5b 調査区……（〃）……3

Ⅲ　E－5c 調査区……（〃）……8

Ⅳ　D－7a 調査区……（〃）……10

Ⅴ　D－10b 調査区……（〃）……14

Ⅵ　J－10a 調査区……（二宮）……18

Ⅶ　G－8a 調査区……（横山）……20

Ⅷ　おわりに……（柳沢）……22

例　　言

1　本書は、福岡市教育委員会が国庫の補助を受けて、昭和56年度に実施した福岡市博多区板付遺跡、ならびに周辺遺跡の調査概要である。

2　発掘調査は、市教育委員会文化課　柳沢一男、二宮忠司、横山邦継が担当し、渡辺和子、小林義彦氏らの協力をえた。

3　本書に掲載した実測図、写真の作成、撮影は、柳沢、二宮、横山、渡辺、小林が行った。

4　本書で使用する方位は磁針である。真北からの偏差は、西偏6°40′である。

5　本書の執筆者は目次に明記した。編集は柳沢があたった。

I　はじめに

板付遺跡は、日本における水稲耕作の最初期の集落遺跡として、1974年に国の史跡に指定された。

指定範囲は、段丘面に形成された集落部分17580.82㎡と、沖積地 9446.97㎡の計 27027.79㎡である。

その段階で、板付遺跡の集落空間と水田可耕地域の範囲は、必ずしも充分に把握されていたとはいいがたいところであった。

したがって、1973年度から福岡市教育委員会は、指定地外の民間地域が開発されるにあたって緊急調査を実施し、遺跡範囲の確認と、板付遺跡の辿ったあゆみを記録作成している。

1981年度に行った調査地区は次のとおりである。

Tab. 1　1981年度調査地区一覧

調査地区	調査地区地籍	調査対象面積	調査面積	調査期間
E－5b	博多区板付２丁目13—14	1,130　㎡	450㎡	81.2.12～4.20
E－5c	〃　板付２丁目12—46	166.11㎡	50㎡	81.4.25～4.30
D－7a	〃　板付５丁目14—２	1,517　㎡	480㎡	81.8.5～9.10
D－10b	〃　板付５丁目８—10	283　㎡	180㎡	81.9.11～10.15
J－10a	〃　諸岡１丁目25—48	245.33㎡	162㎡	81.10.28～10.7
G－8a	〃　板付５丁目１—20	257.53㎡	50㎡	81.5.26～5.30

さて、今年度の調査のうち、環溝集落の形成された北台地の東側で行ったE－5b、5c 調査区は、板付Ⅰ式期水出とそれに伴う水路、井堰が検出された。これは78年度に調査されたG－7a、7b 調査区の水田に連れて、台地東部の沖積地で新たに水田が営まれたことをしめす。

南台地の東側沖積地に接するD－7a 調査区では、古墳時前期の水出が、水路とともに検出された。

また、南台地西側のG－8a 調査区では、奈良時代の水出、水路ともに道路（幅広の畦畔か？）が、検出された。

このように、板付遺跡の台地に接する沖積地は、夜臼期以降～弥生、古墳時代さらに古代の水山が、複数の面をなして埋没していることが明らかとなった。しかし、水田面を確認し、露出させるうえで不可決の氾濫砂層の堆積状況は、必ずしも良好とはかぎらない。また水田一枚の面積を知りうる調査例もない。調査方法を含めて、今後の課題としたい。

なお、今年度調査によって出土した遺物は、時間の制約上ほとんど未整理の状況である。詳細は、遺物整理の完了をまって改めて報告することにしたい。

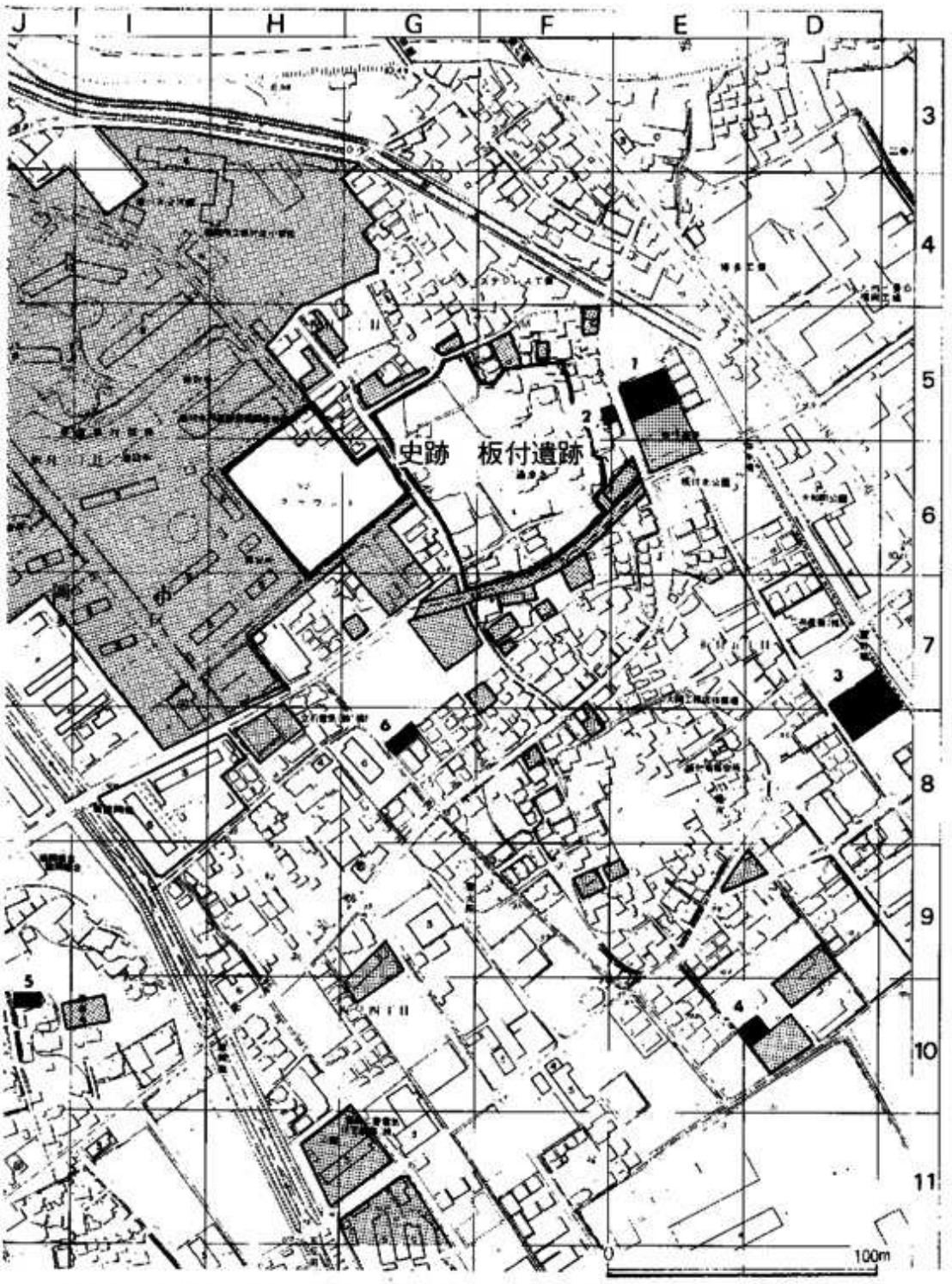

Fig. 1　1981年度調査区位置図（1/5000）　アミ点は既調査地区

1．E－5b　2．E－5c　3．D－7a　4．D－10b　5．J－10a　6．G－8a

Ⅱ　E－5b 調査区

本調査区は、北台地の環溝から東に40m ほどに位置し、台地裾と一段下った沖積地にかかる地点である。79年度に調査されたE－5・6 調査区に接し、E－5c 調査区の道路をはさんだ東側である。

層序

本調査区の基本的な土層堆積はつぎのとおりである (Fig.2)

1層　表土（水田耕作土）
2層　床土（黄褐色粘質土）
3層　暗灰褐色砂質土（a・b・c に細分される）
4層　黒褐色粘質土
5層　暗灰褐色砂質土（多量の土器片を含む整地層）
6層　灰色砂質土（部分的にa・b・c に細分される）
7a 層　暗茶褐色砂質土（a₁・a₂に細分される）
7b 層　黒褐色粘質土
8層　黒土粘土～シルト
9層　灰色粗砂・黒色粘土互層

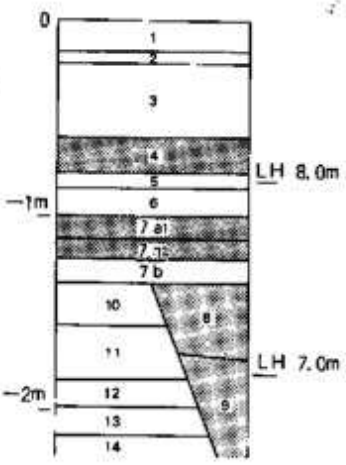

Fig. 2　土層柱状図

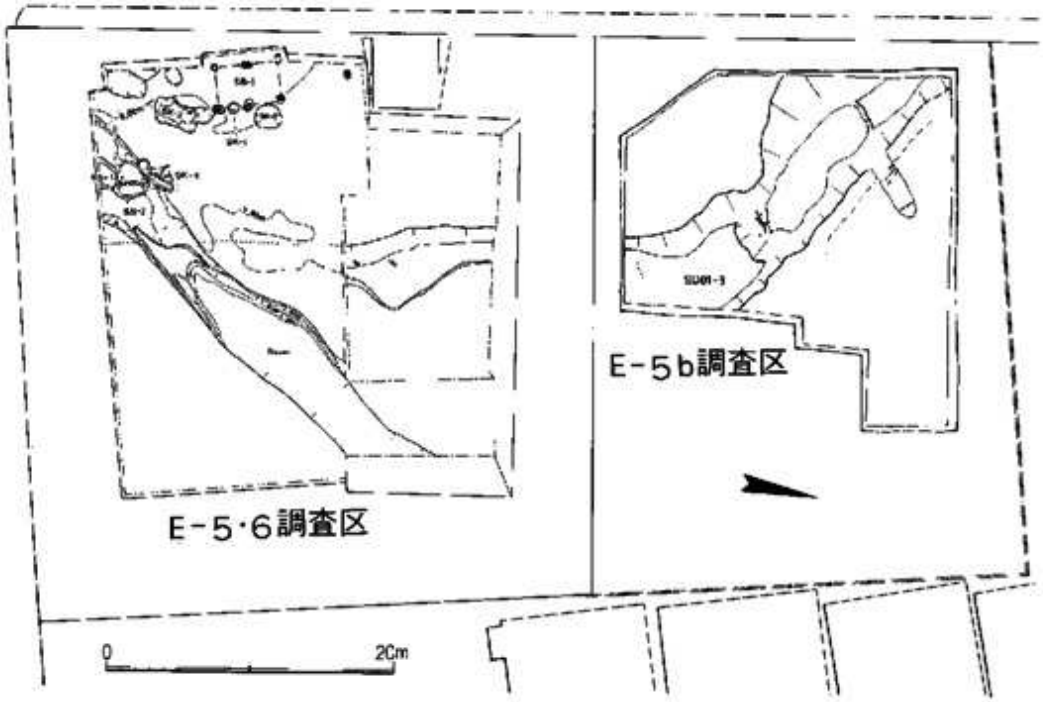

Fig. 3　E－5 b 調査区位置図

Fig. 4　調査区全景、板付Ⅰ式期水田と水路（南東から）

Fig. 5　板付Ⅰ式期水田と水路（北東から）

10層　青灰色砂質土

11層　黒灰色粘質土

12層　青灰色粘土

13層　黒色粘土

14層　八女粘土層

8・9層は、10層から落ちこみ、発掘区の東よりに検出された旧河川流路の埋土である。

検出された主な遺構は、4層水田、7a 層の水田とそれに伴う水利施設がある。4層水田は古代末～中世、7a 層水田は板付Ⅰ式～Ⅱ式である。

板付Ⅰ～Ⅱ式水田と付属施設（Fig. 4・5・6）

7a₁層と7a₂層の2枚の水田が重複している。7a₁層は板付Ⅱ式期、7a₂層は板付Ⅰ式期である。

板付Ⅰ式期水田は、台地端に沿って北流する溝**SD01－B**の東側に広がる。**SD01－B**は、幅5～8m、底面の中途に1m近い段差がつく。段斜面には杭が打ちこまれ、横木をわたして井堰を設けている。井堰上方の溝の深さは 0.3～ 0.5m、下方の深さは 1.2m あまりであるが井堰からはなれるにしたがって除々に上る。

水田水口は、**SD01－B**井堰下方の底面が上った側方に設けられている。幅 1.5m、長さ4.5m にわたってゆるい窪みがあり、溝に平行して三列の矢板列が打ちこまれている。溝に沿う

Fig. 6　板付Ⅱ式期水田と水路（南東から）

畦畔は、重複する7a1層水田の耕作によって削平され遺存しない。井堰上方の溝の東側にも水口が設けられたと思われるが、調査範囲内では検出されていない。

SD01－Bの埋土は、黒褐色粘質土で多数の植物遺体を含む。堰下方の溝底から石斧柄の未成品が出土した。出土土器は、夜臼式土器、板付Ⅰ式土器で、水口周辺から板付Ⅰ式の丹塗摩研大形壺、彩文を施した壺などがある。

7a1層水田は、SD01－B埋没後に、その窪みに沿って堀削されたSD01－Aを水路とし、7a2層水田に重複して広がる。7a1層水田耕作土とのあいだにうすい砂層をかむが、それがなく充分に分離しえないところもあった。

溝SD01－Aは、幅3～4m、深さ 0.5m の浅皿状の断面形である。埋土は灰色堆砂で夜臼式・板付Ⅰ式・Ⅱa式・Ⅱb式土器を含む。

SD01－Aの肩部には、幅1m前後、高さ0.2m ほどの畦畔がある。水口は、畦畔の切れ目に幅 0.6m、水田内部に 0.5m ほど入りこんだ窪みをなす。内部に杭を打ち横木をわたしている。

7a2層水田は、発掘区内に他との境界をしめす杭、矢板列、畦畔などがなく、さらに広がっていたと思われる。したがって水田一区画の広さは 220㎡以上が考えられる。

7a1層水田は、水口に接して、東にのびる畦畔状の高まりがあり、二区画に分れる可能性がある。

Fig. 7　中世水田（4層）畦畔（南東から）

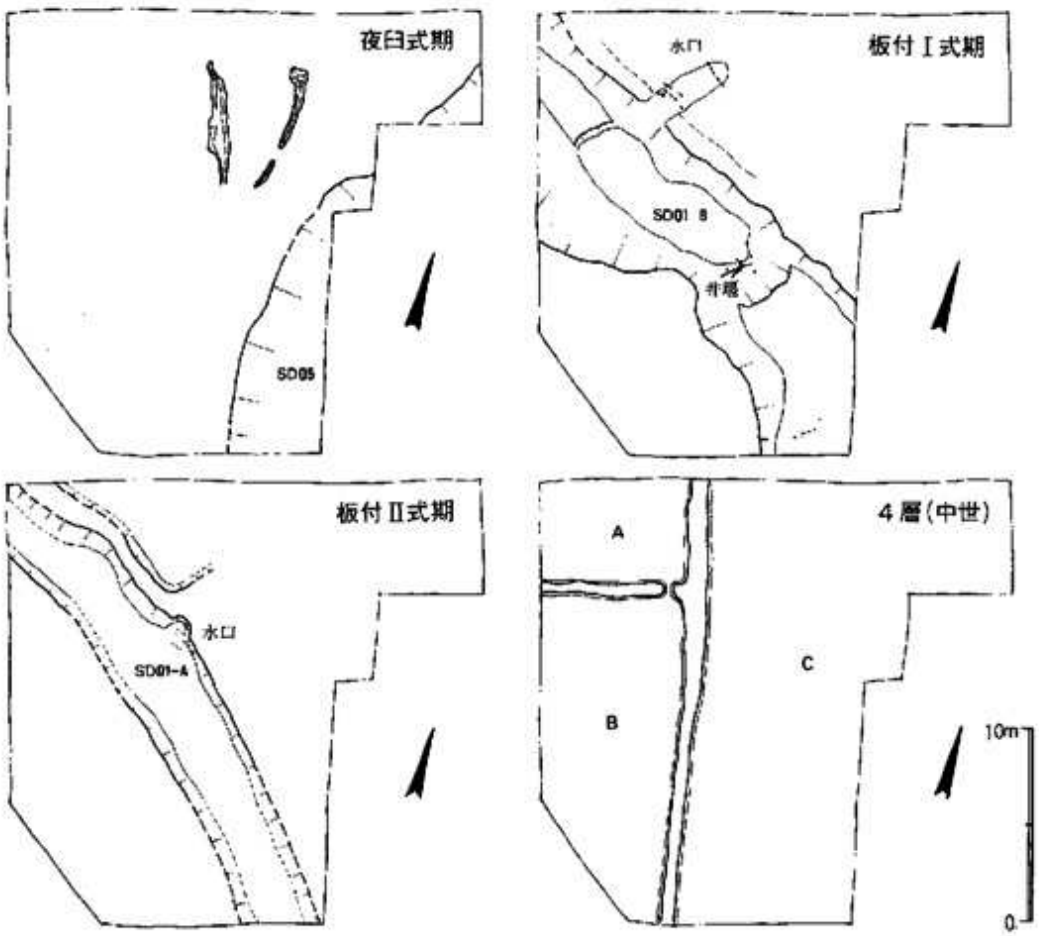

Fig. 8　検出遺構の変遷

4層水田と付属施設 (Fig. 7)

発掘区全面に検出されたが、上（3）層とのあいだに砂などの間層がなく、面として捉えきれなかった。

この水田は、5層整地層上に新たに営まれた。水路は未検出であるが、水田面を区画する畦畔がある。幅 0.8～ 1.2m、高さ 0.2m で、発掘区北よりでT字形に接続する。ちょうど接続部の端に畦畔の切れた部分があり、田越しの水口部にあたると思われる(Fig.7)。

発掘区内では他に境界をしめす区画がないので、各面ともさらに広がると考えられる。ちなみにA面（Fig. 8参照）は35㎡以上、B面90㎡以上、C面 200㎡以上の面積となる。

水田時期を直接しめす遺物はないが、基盤整地層中のもっとも新しい年代の遺物からは、12世紀以後の開田と考えられる。

なお、畦畔の方位はN－25°－Wで、那珂郡条里方位（N－37°－W）とは一致しない。

Ⅲ　E－5c 調査区

本調査区は、環溝端から東へ20mほど離れた北台地東斜面にあたる。調査面積が狭いうえ、調査基底面までの深いところでは2.5mもあるため、限られた範囲しか調査しえなかった。

層序（Fig. 10）

台地斜面のため、上部からの流れ込みの層序をしめす。4・5層は、古式土師器から弥生中期前半の包含層である。6層は中期初頭単純期の土器群、7層は夜臼～板付Ⅱb式の土器をを含む。基盤は鳥栖ローム層である。

検出遺構（Fig. 10）

SD01　7層を切り込んだ溝で、幅 0.8m、深さ 0.2～ 0.3m、台地傾斜に沿った溝である。弥生中期初頭。両端部に杭を打ちこんでいる。

SB01　1×1間以上の掘立柱建物。柱間は、東西 1.8m、南北約2mである。柱穴は 0.4～ 0.5mの不整円形、深さ 0.3～ 0.4mを測る。

SB02　1×1間以上の掘立柱建物。柱間は、東西 2.2m、南北約 2.1m。

他に柱穴掘方状ピットもあるが、調査面積が狭く、建物としてまとめるにいたらなかった。

Fig. 9　E－5c 調査区全景（北から）

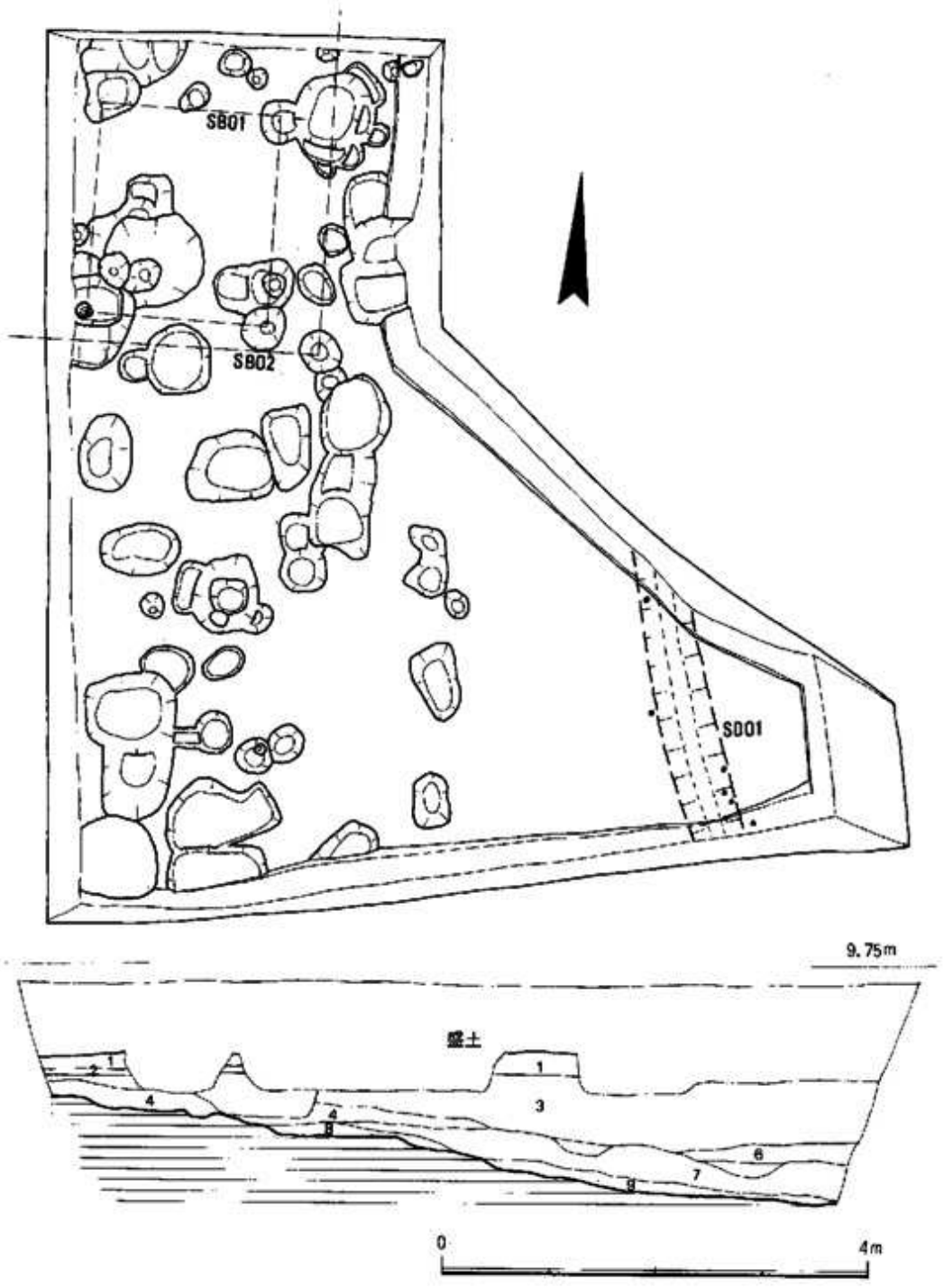

Fig. 10 E－5c 調査区実測図

Ⅳ　D－7a 調査区

本調査区は、南台地中央の東裾部から沖積地にかかる部分にあたる。調査面積は約 480㎡ である。

層序

調査区の基本的な土層堆積は、1層；表土（水田耕作土）、2層；床土互層（黄灰褐色粘土質）、3層；暗灰褐色砂質土、4層；黒褐色粘質土、5層；灰色砂～砂質土、6層；黒褐色粘質土、7層；黄白色粘土、8層；青灰色粘土である。4・6層が埋没水田である。4層は時期不明（おそらく中世）、6層水田は庄内～布留式土器に平行する段階である。しかし、6層上の砂層は調査区全体を覆っておらず、また土壙の重複もあって面として把握できなかった。

そのほかの遺構は、弥生後期の溝、古墳時代の土壙、奈良時代溝などがある。また発掘区東端に中世の河川流路（氾濫原）が検出さ

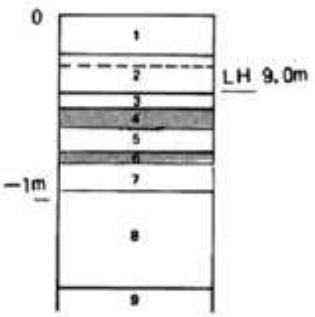

Fig. 11　土層柱状図

Fig. 12　D－7a 調査区全景（東から）

れた。

6層水田と付属施設

水田は、溝SD02の南側に広がる。水路としてSD01と02がある。

SD01は、南西から北東にのび、SD02に接続する。接続する手前で段がつき、大きなよどみを形成する。この段の斜面に杭が打ち込まれ、横木をわたして井堰を設けているが、最下部のみが遺存していた。

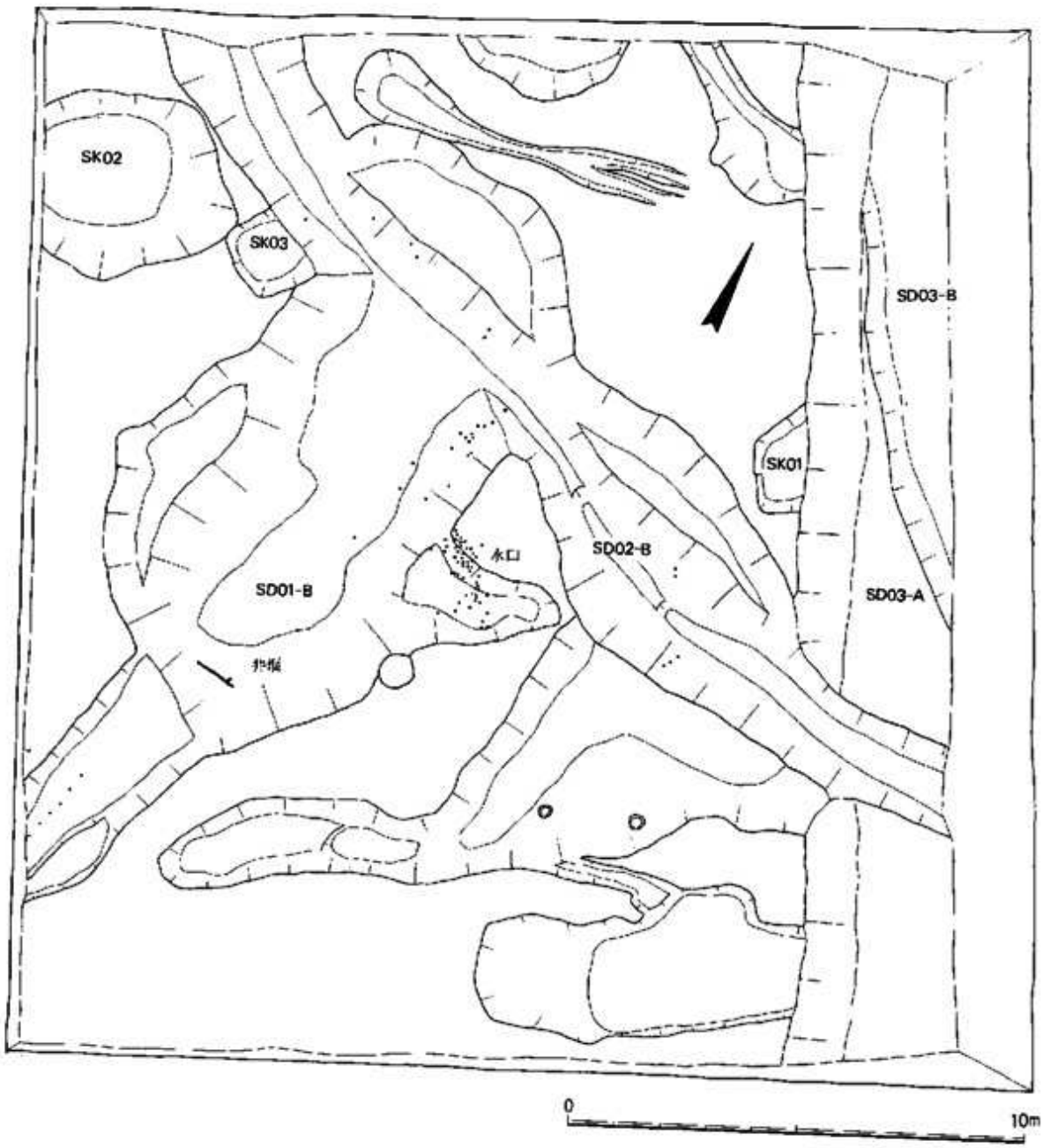

Fig. 13 D－7a 調査区遺構実測図

Fig. 14　水田水口（西から）

Fig. 15　同上、杭検出状況

Fig. 16　SD01—B 木製短甲出土状況

SD01のばあい、段の上方では若干位置のずれた二本の溝が重複している（古期をB、新期をA とする）。段下方のよどみでは大きく広がる上部がA に相当する。

SD02は、北西から南東にのびる溝で、幅1.2 ～ 2.5m、深さ 1.2～ 1.8m、断面U 字形をなし、南東にむかって除々に下降している。埋土は下層が黒色粘質土、上層が暗青灰色粘質土の二層に大きく区分され、SD01のA ・B に対応する。

SD01—A、SD02上層からは布留式平行期の、またSD01—B、SD02下層からは庄内式平行期の土師器が出土した。したがって6層水田は、庄内～布留式期に継続して使用されたと思われる。

南側水田の水口は、SD01の下段よどみにむかって設けられている。幅 1.5m、長さ2.5m にわたってゆるい窪みをなし、多数の杭が乱雑に打ちこまれている（Fig.14、15）。

SD01の下段よどみ部分の埋土から、鍬、鋤などの木製農具とともに、木製短甲の一部が出土した（Fig.16）。 前・後胴に二分する形式の前胴上部にあたると思われる。器表の装飾はみとめられない。上端部に近い2ケ所に、一方は2個、いま一方は4個の小孔が穿たれ、その上部に紐ずれの痕跡がみとめられる。樹種は同定を行っていないため不明。

奈良時代の遺構

発掘区東端の中世旧河川流路に重複し、わずかに残されていた溝（SD03—B）がある。溝幅は不明。深さは 1.3m を測る。埋土は黒色粘質土で、自然木が多量に含まれる。8世紀前半～中頃の須恵器・土師器が出土した。

Fig. 17 SD 01—B 井堰（北東から）

Fig. 18 SD 03—A・B（南から）

V　D－10b 調査区

板付遺跡の南、高畑遺跡北東端にあたる。79年度に調査を実施したD－10a 調査区に接し、弥生中期、古墳時代、奈良時代の溝、土壙が検出された。

SD01

発掘区東端を斜めに横切り、長さ10m を検出したが、さらに東北方向にのびる。幅 5～6 m 深さ 0.8m あまり、D－10a 調査から北にのび、さらに北東に屈曲した蛇行する溝である。埋土は黒色粘質土、深いよどみ状の部分では間層に砂をはさんで上下二層に区分されたが、全体を覆うものではない。小形丸底壺、高杯を主体とした古式土師器が多量に出土した。須恵器はみとめられない。出土木製品には、弓、杵、櫛、鍬、ヘラ状の性格不明品、編錘、建築部材などが、また箕、蓆状製品などの編物も出土した。

SD04－A・B

台地端部に沿って北西にのびる溝である。幅 2.5～3 m、深さ 0.4～ 0.8m と底面に凹凸がある（B）。この溝の埋没後に、ほぼ重複して**SD04－A**が設けられている。埋には、A が黒

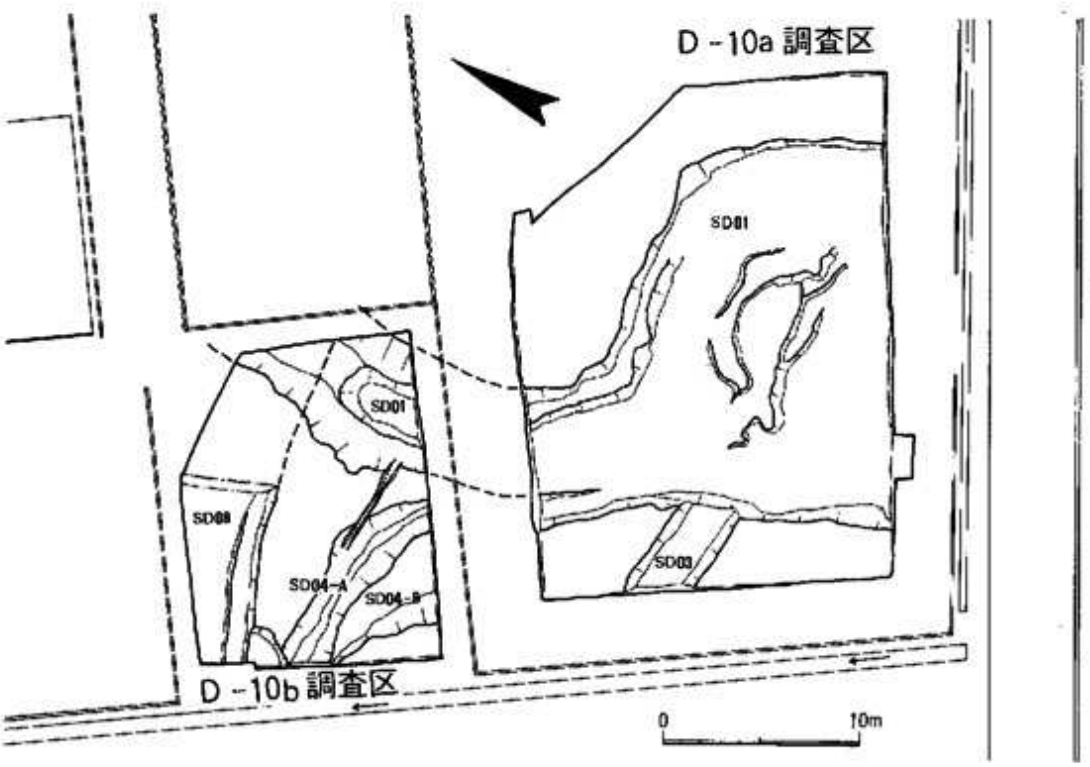

Fig. 19　D－10b 調査区位置図

Fig. 20　調査区全景（北から）

Fig. 21　SD 01遺物出土状況（南西から）

Fig. 22 SD 01出土ネズミ返し

Fig. 23 SD01出土箕

Fig. 24 SD 01出土ヘラ状木製品

褐色粘質土、Bは黒色粘土と砂の互層である。土師器・須恵器が出土。自然木も含まれるが明確な製品はない。8世紀後半に埋没している。

SD05・06

D－10a 調査区では未検出の溝で、**SD04**に沿って北西にのびる。幅1m前後、0.2～0.4mの浅い溝である。重複関係では**SD05**よりも**SD06**が新しい。埋土はともに黒褐色粘質土、06には粗砂がまじる。**SD06**は、**SD04－A**と同じく8世紀後半に埋没している。

SD08

発掘区北半を東西に横切る溝である。北側端部が調査区内で確認されないため、幅は不明である。深さ2.1m以上、埋土は灰色粗砂で、表面の摩滅した土器片が含まれる。床面から弥生中期後半の壺が出土した。溝の壁面がオーバーハングしている部分や、垂直に近いところが多く、旧河川流路の可能性がつよい。

SK02

SD04－B下に検出された。一辺2.2～2.4m、深さ0.8mの土壙である。埋土は黒色粘土。弥生後期後半の土器が出土した。

SK03

発掘区北西で検出されたが、大半が発掘区外である。深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色粘質土。土師器・須恵器が出土した。

180㎡という限られた調査のため、検出遺構のつながり、また遺跡全体のなかでどのように位置ずけられるのか明らかでない。今後の調査をまって、検討を重ねたい。

Fig. 25 SD 04—A・B (北から)

Fig. 26 SD 08 (西から)

Ⅵ　J －10 a 調査区

諸岡丘陵の北東部に周辺を土塁で築いた館跡が一部現存している（一部昭和55年度調査）。この館跡の西側に調査地点であるJ－10 a地点がある。諸岡丘陵の北東の先端部にあたり、東側に諸岡川が流れ、西側は谷部となる舌状台地上に遺跡が立地している。地籍は諸岡１丁目25－48である。今回大和正敏氏の立替え工事が行なわれることとなり先だって発掘調査を実施した。発掘対象面積は 245㎡であるが破壊が予想される約 160㎡にとどめた。試掘調査の結果、井戸状遺構、構状遺構を検出した。ただ館跡の土塁より約２m 程下がっているため遺構の保存状態はかなり悪いものと判断された。遺構の性格として館跡に附属する遺構と考えられた。調査期間は９月28日より10月７日までの約２週間で終了した。

試掘調査の結果とほぼ同一の所見が発掘調査でも得られた。ただ台地は館跡を頂点として東西に緩やかな傾斜を保ちながら河川、谷部とつづくが途中で一段と急激に傾斜を持つことが明らかになった。試掘調査時に溝状遺構と考えたものは建物の雨落溝の可能性が高い。東側からつづく溝は台地が急激に落ちはじめる上端部でほぼ直角に南に向きをかえてつづく。出土遺物は白磁、土師器等が溝内より出土しているところから館跡と同時期（16C）前後の可能性を持つ。井戸は３基検出したが周辺部が砂層のため完掘することは断念した。時期は溝と同一。

Fig. 27　J－10a 調査区全景（西から）

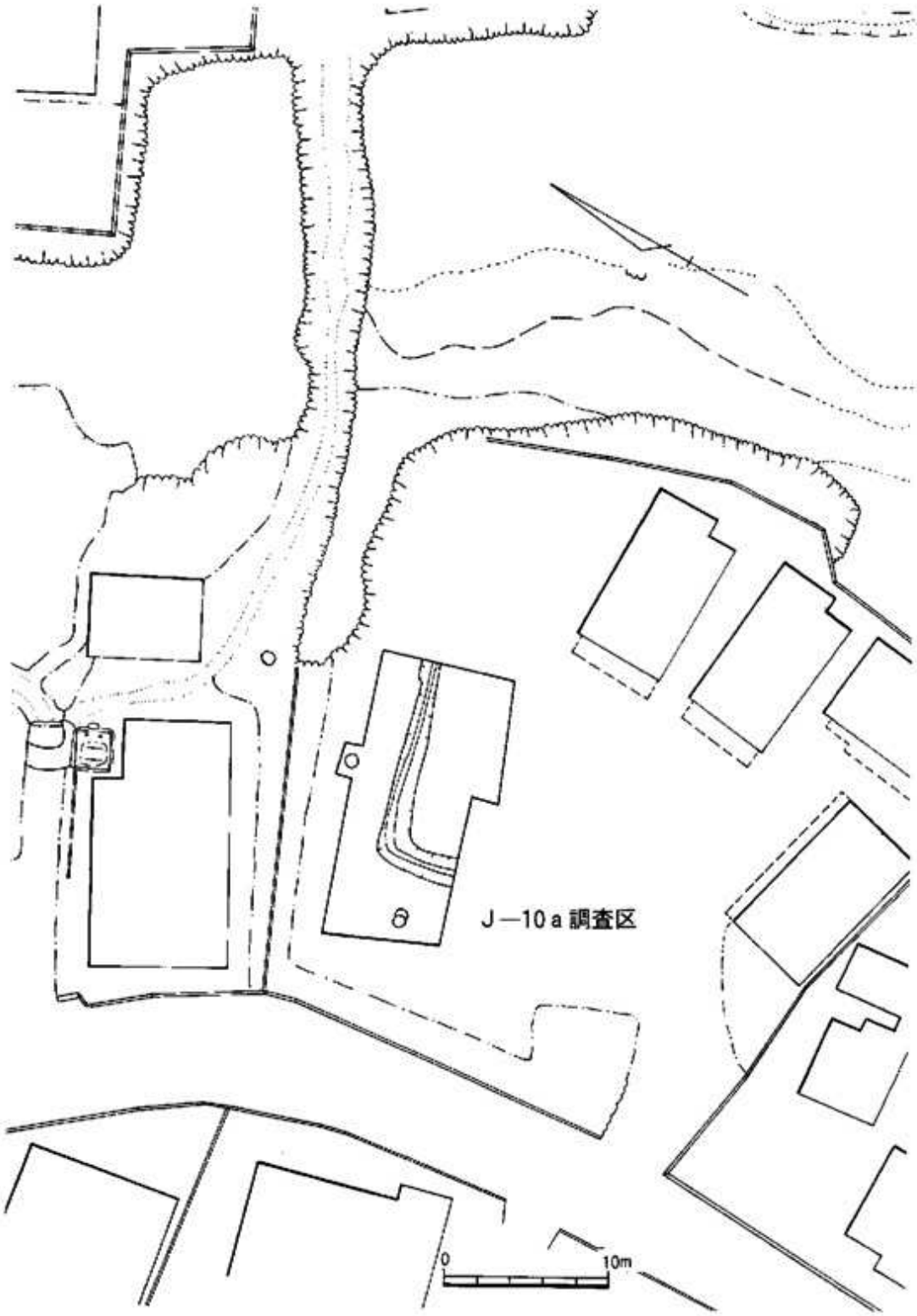

Fig. 28 J—10a 調査区位置図（1/400）

Ⅶ G－8a 調査区

本調査区は、縄文時代終末～弥生時代前期の水田址が検出されたG－7a、7b調査区の南西約 100m の沖積地にあたる。調査では溝三条（SD01～03）、道路状遺構SF01、水田の一部を検出した。

SD01 道路SF01下に検出された。調査区を南北にのびる溝である。上端幅 1.8m、深さ 0.3m を測る。埋土から弥生時代後期に属する土器が出土した。

SD02 道路SF01の東側に平行する溝で、南北にのびる。上端幅 2.8～3m、深さ0.4 m を測る。底面には南北方向に杭列、木樋が付属施設としてある。溝の東側には黒褐色粘質土が広がっており、面として確認しえなかったが水田土壌と考えられる。溝埋土からは奈良時代須恵器、瓦片が出土している。

SD03 SD01の西側に検出された。西側の立上りは不明であるが、SD01より新しい時期の所産である。

SF01 SD01に平行する道路状遺構である。下端幅 2.7m、上端幅 1.5～1.7m、明灰褐色微砂質土を 0.2m ほど盛りあげて構築している。溝SD01と同一時期と推測される。

その他、SD02下には暗灰色粘質砂土～灰黒色粘質土の堆積がみられ、弥生時代中期後半の土器を伴出するしがらみ状遺構が検出された。構築材には、丸木のほかに樋残欠などを使用している。

奈良時代の水田に伴う水路SD02、道路状遺構SF01の方位は、西偏約30～40°をしめす。限られた調査範囲のため断定しえないが、那珂郡条里方位（N－37°－W）に近く、条里地割に関連する可能性を否定しえないところである。今後の調査にまちたい。

アミ点は溝をしめす
縦線は道路状遺構盛土をしめす。

Fig.29 G－8a 調査区断面図

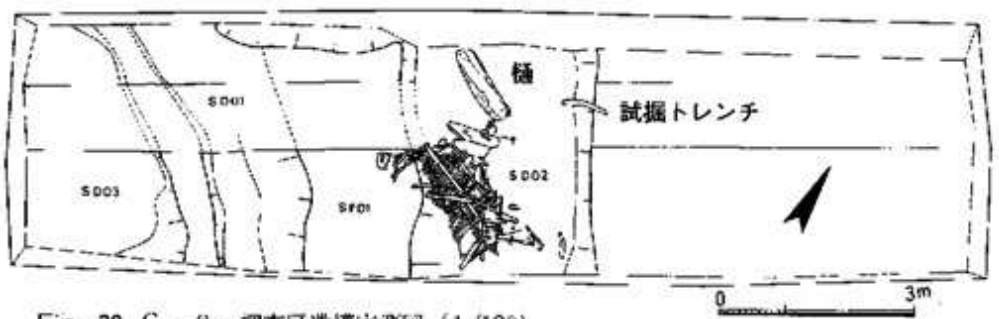

Fig. 30 G－8a 調査区遺構実測図（1/120）

Fig. 31 調査区全景
（東から）

Fig. 32 SD02（南から）

Ⅷ　おわりに

今年度実施した各調査区の概要は以上のとおりである。詳細は遺物整理の終了をまって報告することにして、最後に2、3の点について触れまとめとしたい。

第1は、E－5b 調査区で検出された板付Ⅰ式期ならびにⅡ式期の水田である。水田面上の埋没土が良好な砂層でなく、その分離が必ずしも充分とはいいがたいところであるが 水路、井堰、水田取排水溝（水11）を検出することができた。板付Ⅰ式期水田の下層には間層をはさんで夜臼式期の旧河川流路が確認された。

板付遺跡では、78年度に調査されたG－7a 、7b 調査区の水田がある。その所見と併せみると、G－7a 、7b 調査区の水田は、夜臼Ⅰ式期に遡る水田が検出され、まず台地西側の沖積地で水田が営まれたことが知られている。この段階の台地東側沖積地は、河川流路が安定せず水田耕作が行われていないことは、E－5b 調査区の板付Ⅰ式期水田下の状況のとおりである。東側沖積地は、夜臼式期の末頃に河川が後退し、氾濫原理没後に後背湿地状の地形となったことが、板付Ⅰ式期における水田開発を可能にしたと思われる。こうした新たな水田の獲得が、北台地から南台地を含む集落拡大をうながす要因となったと思われる（Fig. 33…山崎純男「福岡市板付遺跡の成立と展開」『歴史公論』74号より転載）。

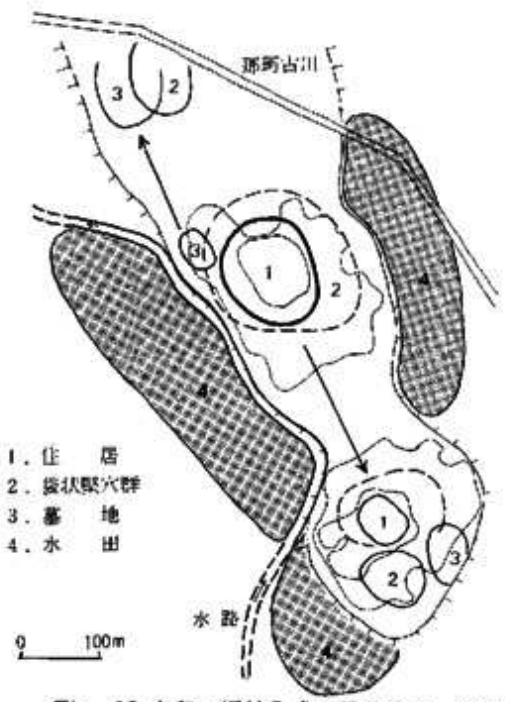

Fig. 33 夜臼・板付Ⅰ式土器共伴期～板付Ⅱ式期
板付遺跡の集落変遷

第2は、E－5b 調査における4層水田（平安末頃か）をはじめ、南台地東南側沖積地D－7a 調査区の古墳時代前期の水田、あるいは北台地西側沖積地G－8a 調査区の奈良～平安期の水田のように、弥生時代以降の水田の検出である。

D－7a 調査区では、水路、井堰、水田の水口が検出されている。G－8a 調査区では水路とそれに平行する道路状の高まりが検出された。E－5b 調査区は水田畦畔が確認された。いずれも調査面積が限られていたためその面的な広がりを確認しえていないが、水田耕作の技術推移を知るうえで貴重であり、上部の埋没水田についても今後注意して調査をすすめる必要があろう。

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第83集
板付周辺遺跡調査報告書 (8)
1982年３月31日
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8の1
印刷　㈱松古堂印刷